

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
「元氣いっぱい 笑顔で 学び合う」児童の育成 ～自分大好き、友だち大好き、学校大好きな 東脊振の子～	(1) 自分つくりの推進(児童理解・支援の推進) (2) 学びつくりの推進(道徳授業の推進と学力向上) (3) 仲間つくりの推進(豊かな体験活動の推進)

A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

3 目標・評価

① 特色ある学校作り推進を図る

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○学校経営方針	本年度の重点目標の周知	・教職員、児童、保護者に周知する。 ・認知度を85%以上にする。	・職員会議、全校集会の場で説明する。 ・学校便り、PTA総会、学級懇談、学校ホームページ、まちCOMIメール帳等で機会あることに周知していく。 ・まちCOMIメールの登録率を向上させる。(100%に近づける)	A	認知率が高まった。 メールの加入も残すところ8家庭となった。	未加入の保護者には、個別に働きかける。
学校運営	○校内研究の推進	・校内研究(道徳)の推進	全職員が研究のねらいを理解し、年1回以上の研究授業をする。	・外部講師から適宜指導を受け、ねらいが明確な指導案を作成する。 ・授業者を含めた学年組織による授業づくりに取り組みませ、一人一人の力量を向上させる。	A	研究発表会では研究の成果を出すことができた。	さらに研修を深め、授業力を向上させていく。

② 自分つくりの推進(児童理解・支援の推進)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・あいさつの励行 ・相手を思いやった言葉遣い	・「あいさつがよくなった」と言う児童を80パーセント以上にする。 ・「～さんづけ」や「正しい言葉遣いができた」と言う児童をそれぞれ70パーセント以上にする。	・あいさつについては、毎月の生活朝会で必ず話をするようにしたり、全校でのあいさつ運動に年1回取り組んだりして意識を高める。 ・まず学習の場において正しい言葉遣いを身に付けさせ、普段の生活の場でもいかにさせるようにする。 ・PTA総会や学級懇談会、各種お便りを活用して、学校の取り組みを保護者に周知し、家庭と連携した取り組みを推進する。	B	・校内で挨拶を自主的に行う児童が増えたが、地域で挨拶する児童はまだ多くはない。 ・正しい言葉遣いが十分には身につけていない児童が少なくない。	・挨拶については家庭や地域と連携した取組を継続し、学級懇談会や地区懇談会等で話題にあげていく。
教育活動	●いじめ問題への対応	いじめの早期発見・早期対応に向けた体制づくり	・教育相談体制を充実させ、スクールカウンセラーや保護者との連携を図る。 ・担任は児童の実態を把握し、いじめのない学級づくりを図る。	・いじめに関するアンケートを実施し、児童の実態把握に努め、いじめの未然防止に努める。 ・1チェックを4月と2月に実施し、それぞれの結果や二つのデータから見える児童の変容を学級経営や学年経営に生かす。 ・「吉野ヶ里町いじめ防止基本方針」の内容を熟知し、早期発見、早期対応の体制を整える。 ・連絡会や児童理解の会を活用して、気になる子についての情報を全職員で共通理解する。	B	・毎月のいい日アンケートで実態把握をするように努力した。気になる問題行動などはスクールカウンセラーと連携して解決できた。 ・1チェックで5月からの児童の実態と集団に関する実態の変容を把握し、伸びてきたよさをほめたり課題を見つけたら、2回目チェックの時期が2月だったので、	・いい日アンケートの内容を担当が把握できていても、その内容を本人にいち早く尋ねたり一緒に悩みをじっくり聞いたりできないことがあった。優先的に児童に寄り添うことを心がけて対応したい。 ・2回目チェックの時期が2月だったので、
教育活動	○家庭との連携	規則正しい生活と食習慣	・「早寝」「早起き」の児童の定着率を85パーセント以上にする。 ・児童の「朝食喫食率」は95パーセントを目指す。	・「保健だより」や「給食だより」を発行したり、試食会で栄養士による講話を取り入れたりして、正しい生活習慣や食習慣の大切さについて周知し、健康管理意識を高める。特に「早寝・早起き・朝ごはん・毎日うんち」について児童と家庭の両方に意識を促す。	A	早ね、早起き、朝ごはんが定着した児童が増え、95%以上ができていた。	・朝食の喫食率は向上しているが、献立に課題を感じることもある。家庭を啓発し、バランスのとれた食事を促していきたい。

③ 学び作りの推進(道徳授業の推進と学力向上)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	・聞く力、発表する力、学び合う力の向上 ・読む力、書く力、計算する力の向上	・「友だちの考えをしっかりと聞いた」「自分の考えをしっかりと伝えた」「友だちの考えと比べて意見を述べた」「書くことに自信がある」「計算に自信がある」と言う児童の割合を80%以上にする。 ・児童が「しっかりと宿題に取り組んだ」「学習の目標時間に達成できた」保護者が「家庭での学習の様子を知るように努めた」項目で80%を目指す。 ・児童の家庭学習の時間で、低学年20～30分、中学年40～60分、高学年60分～90分を80%達成できるようにする。	・学習指導において、学び合う活動の時間を積極的に取り入れる。 ・スキルタイムの内容の検討を行い、改善を図る。 ・家庭学習の定着のために、保護者への啓発を行うとともに、中学校のテスト期間と連携した家庭学習がんばろう週間では、児童の生活実態を考慮し、意欲付けができるようなカードを準備して、家庭学習の習慣づけを図る。 ・休み時間に次の授業の準備をすることを徹底させる。 ・効果的なグループ編成や場面に応じた場の工夫を行う。	B	・まなび合う活動を日常的に取り入れることができた。 ・スキルタイムでは、児童の実態に合わせてポイントを絞って取り組ませたことは、効果が上がった。 ・次の授業の準備をすることは、全校で統一して取り組み、定着している。 ・「東脊振授業」スタイルの定着を目指しているが、学級によりその定着度には差がある。学年間の学力差も大きい。	・次年度も配置される予定の学力向上推進教員の支援により、より効果的な指導法を確立させていく。 ・朝の「国語タイム」「算数タイム」では級外の職員と担任とが連携して指導を継続させていく。 ・放課後や昼休みの補充学習を充実させていく。
教育活動	●教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	ICTを活用した教育の実践	・校内研修等を通して全員が基本的なスキルの習得する。また、効果的な活用法の習得を80%以上の職員が達成する。	・ICT活用の効果的な方法を検討する。 ・PC教室のタブレットの有効な活用法について研修を行う。 ・電子教科書の効果的な活用法について研修を深めていく。 ・校内研修で職員のICTスキルの向上を図る。	B	・ICT機器が充実し、日常的に電子黒板を活用した授業を実施している。職員の技能も安定してきた。さらに有効な活用法についての研修が必要である。	・先進事例を活用して研修を行っていく。長期休業等を利用してさらなる職員のスキルアップを、目指していく。
教育活動	○読書力の向上	図書館教育の充実	・図書貸し出しにおいて目標冊数を目指す。(低…150冊、中…100冊、高…80冊)。	・「図書館だより」で本を紹介したり、図書に親しませるために図書館まつりを年2回実施する。 ・家庭読書を促すために、本(図書・新聞・雑誌等)を通した親子交流に取り組ませる。 ・本の分類について指導し、図書の時間に貸し出しをすることで、読書の幅を広げさせる。	B	・ほとんどの児童が学校図書館を利用し、多くの本に親しむことができた。目標冊数も多くの児童が超えている。ただ、家庭での読書が十分には定着していないことが保護者アンケートから分かった。	・家庭読書を促すため、読書週間に親子読書カードに取り組むなど手立てを取る必要がある。
教育活動	○道徳授業の推進	道徳教育の充実	・自己をみつめ、自他を認める取り組みを行う。 ・教科や体験活動との関連を明確にする。	・「善悪の判断、自律、自由と責任」「親切、思いやり、感謝」「規則の尊重」「生命の尊さ」を重点内容項目に取り上げ、授業の充実を図る。 ・別業を見直し、より実効性の高い指導を行って行く。	A	・研究授業を通して教職員の指導力が向上してきた。道徳の授業については特に工夫して臨む体制が整ってきた。学年部間の協力体制も充実してきた。	・道徳の評価についての研究を深めていくことにより指導の効果をさらに高めていく。 ・中学校と連携した取り組みを充実させていく。
教育活動	○学習環境の改善・充実	基本的な生活習慣や学習習慣の育成	・生活習慣や学習習慣に関する評価項目において、児童や保護者の達成度を85パーセント以上にする。	・家庭で鉛筆を研いでくると学習道具を使えるように準備することを家庭へ呼びかける。 ・学習ルールを見直し、徹底を図る。 ・学年に応じた量の課題を出し、家庭学習習慣の定着を図る。 ・学年便り等を活用し、家庭との連携を密にする。	B	連絡帳を活用し、家庭との連絡を密にしたり声をかけたりしたことによって、家庭学習は、ほぼ全員の児童ができるようになった。 ・特定の児童が課題や道具を忘れることがあり、なかなか改善しない。	・家庭の協力が得られにくいところもあるので、さらに家庭との連携を密にしていかなければならない。保護者の啓発が必要である。 ・学校の指導で基礎学力を身につかせていく。

④ 仲間つくりの推進(豊かな体験活動の推進)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	業間や休みにあける遊びや体づくり	業間や休みにあける遊びや体づくり	業間や休みにあける遊びや体づくり	B	・概ね外で元気に遊んでいるが、高学年女子の中には外遊びを好まない児童も多く、体力テストの結果も振るわない。 ・全体的にシャトルランの結果が思わしくない。	・外遊びの日の設定や縦割りスポーツ大会など児童が運動したいと思う意欲を高めるような手立てを充実させる必要がある。 ・みんなで遊ぶ日を行うことを教師が共有し、学年に応じた遊びに全校で取り組むことができるようにする。
教育活動	○人権・同和教育の充実	望ましい人間関係・集団作りの育成	・「学校が楽しい」と言う児童を9割以上、「感謝」や「やさしさ」を言葉や行動で表すことができた」児童を85パーセント以上にする。 ・「学校が思いやりややさしさを育てることができている」と思う保護者の割合を80パーセント以上にする。	・人権に関する集会年2回以上と人権教室年3回以上を開催し、児童の人権意識を高める。 ・児童対象の人権に関する集会や人権教室の活動を保護者に知らせたり家庭教育学級等を開催したりすることで、人権教育の考え方を保護者にも広める。	A	・道徳の学習と関連づけた人権教育を全学級で展開することができた。学校が楽しいと答える児童の割合も9割を超えている。 ・「ほかほかカード」の取組が定着しており、お互いのよさに気づく力が伸びてきた	「ほかほかカード」の取組を継続していく。 児童同士のよさ見つけをさらに充実させていくと共に、教師の「よさを見つけていく」とも伸ばしていく。
教育活動	○地域の人・自然・ものとのかわり	地域と自分とのかわり	「東脊振のことがよくわかった」「東脊振に住む人々のありがたさに気づいた」と言う児童の割合を80パーセント以上にする。	・生活科や社会科、総合学習に地域素材を導入する。 ・学びの中で、人と自然にかかわる場面を設定する。 ・道徳との関連を常に考慮して指導する。	A	・地域の方と連携した活動を計画的に実施することができた。 ・「東脊振にすむ人々のありがたさ」に気付く発言が増えた。	・次年度は、道徳アンケートの項目などに活用する必要がある。より客観的に把握することで、さらに効果的な手立てを講じていく。

研究発表会の参加者の声から、本校で研究してきた道徳教育について高い評価を得るとともに、新たな課題も見つけることができた。学力向上については効果が表れている学年や教科がある一方、まだ十分には指導の効果がでない部分も少なくない。学力向上対策コーディネータを中心に、現状分析や対策を確立し、徹底して実践していることが大切であるとする。学力向上推進教員との連携を深めながら学力向上について有効な手立てを充実させていく。家庭での読書習慣や家庭学習習慣の確立のためには家庭との連携協力体制をさらに充実させていく必要がある。